

1 事業名 大人の野外活動実践講座

2 必要性

独立行政法人国立青少年教育振興機構の「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」報告書（平成 22 年 10 月 14 日）によると、①子どもころの体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持っている人が多い ②年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友達との遊びが減ってきている という結果が出ている。このような現状において、文部科学省の推進している「体験活動推進プロジェクト」では、青少年の体験活動の推進を図るため、①体験活動の理解を深めるための普及啓発に取り組むこと ②自然体験活動の指導者を養成すること ③防災教育の観点に立った体験活動を推進することを重要視している。

これらのことを効果的に推進していくためには、まずは親の世代に体験活動の楽しさを味わってもらい、その楽しさを親が子どもに伝えていくことで、子どもにより多くの体験活動をさせることができると考える。

本事業は、若い親やこれから親になる若者、そして野外活動に興味を持っている人が集まってネットワークを構築するとともに、野外活動の楽しさを味わい、その楽しさを青少年に広めることを主たる目的とした事業であり、国立青少年教育振興機構の施設として積極的に取り組むべき事業である。

3 趣旨

- ・大人が自然体験活動をすることで、青少年への自然体験活動の普及を目指す
- ・若い親が集まってネットワークを構築することで、子育て支援をめざす
- ・防災の視点を取り入れ、非常時に対応できる力を育成する

4 期日

平成 24 年 7 月 14 日（土）～7 月 15 日（日）

（会場 国立三瓶青少年交流の家）



5 参加者

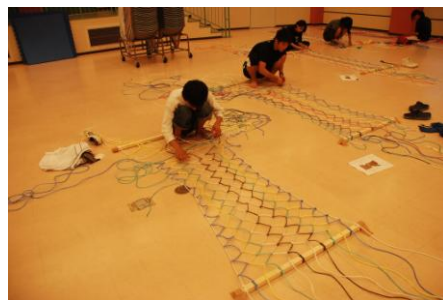
- (1) 募集対象・人数 青少年教育関係者、学校教育関係者、若い親（未就学児の保護者）、大学生、野外活動に興味・関心のある方 20 名
- (2) 参加人数 22 名
- (3) 参加者分析 社会人 7 名、大学生 15 名

7 講師等

国立三瓶青少年交流の家
企画指導専門職

8 参加経費

3000 円(食事代 1350 円・シーツ代 200 円・保険料 200 円・教材費 1250 円)



9 事業の内容

(1) 事業の特色

本事業は、大人を対象とした事業である。本事業では、体験活動に興味を持っている大人が集まるので、同じ意識を持った大人同士でネットワークを広めることができる。そして、大人が体験活動の楽しさを味わい、そのスキルを身につけることで、その楽しさなどを青少年に普及することができる事業である。また、今回は身近ないろいろなものを使って野外炊飯をする。アウトドアの道具がなくてもさまざまな場面に対応できるということを実感することができ、防災の観点も備えた事業である。



(2) プログラムデザインと企画のポイント

①身近なものを使って

近年のアウトドアブームの広まりから、いろいろなキャンプ場や施設を中心に、野外活動の初心者を対象にキャンプ入門セミナー等が開催されている。そこで本事業では、キャンプや野外活動の入門編から一歩進めた内容に取り組み、「市販のものがなくても工夫次第では様々な場面に対処できる」ことを実感できるようプログラムを企画した。

具体的には、初日はテントがなくても就寝できるよう、ビニールひもを使ったハンモック作りを企画した。さらに夜には、①寝袋だけで野宿 ②ハンモックで就寝 ③テント泊 ④宿泊棟で就寝 と4つの選択を設け、参加者のニーズに応じられるようにした。

また、夕食作りでは、ご飯を炊く方法として、①鍋で炊く ②空き缶を使って炊く ③ビニール袋を使って炊く ④市販のめし袋を使って炊く の4つの中から選んで炊飯できるようにした。また朝食には、牛乳パックとアルミ箔を使ってのホットサンド作り、昼食には耐火レンガを参加者自身が積み上げて石釜を作り、ピザを味わうことを企画した。ダッチオーブンやツバーナーなど特別な器具がなくてもおいしいものが作れることを参加者に実感してもらいたくて企画したが、これは非常時に対応できるスキルを身に付けるものでもあり、防災の視点を取り入れた企画になった。



②参加者同士のネットワークの構築

本事業のねらいの一つに、「参加者同士のネットワークを構築する」がある。そのため、本事業の最初にアイスブレイクを行い、初対面同士の参加者を結び付けるよう企画した。具体的には、自分の出身地や趣味を紹介するとともに、小グループ内で共通点を見つけることで、これからの会話のきっかけづくりになるようにした。また、活動の場面では班をつくり、お互いに協力して活動することでネットワークが広まるようにした。夜には情報交換会を開催し、さらに会話が広がるよう企画した。

(3) 広報のポイント

松江・出雲・大田・三次の各幼稚園と保育園にチラシを配り、参加を呼び掛けた。特に当施設を利用したことのある幼稚園・保育園には保護者一人ひとりにチラシが渡るようにし、若い

保護者の参加を募った。そして、県内の小学校にチラシを配り、直接子どもに指導をする先生方へ広報した。また、将来の指導者をめざす大学生にも広報し、参加を呼び掛けた。

(4) 日程表

		12:30	13:00	13:30	16:30	20:30	23:00
7月14日	受付	開講式 オリエンテーション	ハンモックを作ろう 自分用のハンモックを作 りましょう。夜はそこで寝 てみます。	かまどを作ってご飯を炊こう ビニール袋や空き缶を使ってご飯を炊 きます。おかずは、カレー、焼きそば、 すき焼風煮。いろんな味に舌鼓!	情報交換会、入浴 たき火を囲んで、ゆっ くりとした時間を味わ いましょう。	就寝 テント、ハンモック、 野宿、セミナーハウスで泊ま ります。	

		6:30	7:00	9:30	13:30
7月15日	起床	簡単!朝食づくり ホットサンドイッチと サラダで簡単朝食づく りをしましょう。	石釜を作って本格ピザを作 ろう 耐火レンガを使って石釜を作り ます。そこで作ったピザは絶品!!	閉講式 退所	

(5) 運営のポイント

①自主的な活動ができるように

今回の事業を運営するにあたり、担当する職員数が少なかったため、参加者が自主的に活動に取り組めるよう、しおりにそれぞれの活動の手順ややり方を記載し、参加者に配布した。それぞれの活動前には職員が説明を行ったが、参加者はその説明をしおりと照らし合わせながら聞くことができたので、活動内容をより理解することができた。

また、石釜作りでは、異年齢で構成する班を作り、参加者同士の交流が深まるように工夫した。

石釜を作ろう



(6) 安全管理のポイント

今回の活動は今まで当施設で行ったことがないもの（ハンモック作り、石釜作りなど）が多かったため、それぞれの活動が安全にできるよう事前に何度も試作を繰り返し、問題点の解決を行った。

また、野外炊飯の説明の中に「安全面について」という視点を設けた。事前に危険なことが予想されるポイントについて説明することで、参加者は活動中にやけどやけがをすることなく安全に活動できた。

石釜づくりでは、当日強風が吹き荒れたので、当初設置予定の場所から火災の恐れのない営火場に設置場所を変更した。この変更により火災の心配はなくなったが、直射日光が当たりかなりの暑さになったので、急きょタープを2つ張り、熱中症対策を行った。



(7) アンケートの満足度・おもな記述

満足 14 名 (70%) やや満足 6 名 (30%) やや不満 0 名 (0%) 不満 0 名 (0%)

- ・とてもよかった。
- ・充実した時間になりました。
- ・今後持って帰って生かせそうです。
- ・久しぶりに三瓶に来て、大自然の中で野外活動ができて楽しかった。
- ・今回体験したことは職場や家庭に帰ってぜひやってみます。充実した時間をありがとうございました。
- ・アウトドア体験…これからの子どもたちにもいっぱい体験させてやりたい。本当の意味で"生きる力"につながると思う。
- ・普段野外活動をする機会がないので、とても有意義だった。
- ・学生と一般と分けた方が良くも…と思いました。
- ・準備など、もう少しみんなですべきだと思います。



10 成果と今後の課題

<成果>

①今後の広まりに期待

今回行った活動は実践的なものが多く、参加者が自分のフィールドに持ち帰っても使えるものが多くあったように思う。アンケートの記述の中にも、「今後持って帰って生かせそうです。」というものがあり、今後青少年の体験活動を普及していくうえで今回の講座内容が少しでも役立っていればうれしい。

また、参加者の中には「次回も同じような講座があれば声をかけてほしい。」という声もあった。今回は社会人からの応募が全体の 1/3 であったため、この講座を続けていくことで社会人の参加を増やし、体験活動を青少年に普及していくリーダーとなる大人を増やしていきたい。

<課題>

①参加者の負担感の軽減

今回の活動では、ハンモックを各自で作成し、夜はそれで寝るという流れで行ったが、ハンモック作りに予定よりもかなり時間がかかり、参加者への負担が大きかったように思う。この負担感を改善するためには、今回のひもで編むハンモック作りのほかに、布や網を使った簡単なハンモック作りも提示し、どの作り方で行うのか参加者自身に選んでもらうという流れにしてもよかったように思う。また、日程が 1 泊 2 日と短かったため、2 泊 3 日に変更し、ゆったりとした時間の中で製作に取り組んでもらえればよかった。

②ネットワークを作るための手立て

また、参加者同士のネットワークを構築するための手立てをもう少し考えおけばよかったように思う。特に、夜の情報交換会では大学生は大学生同士で、社会人は社会人同士で固まってしまい、お互いの交流を深めることができなかった。次回は情報交換会の内容にも交流が深まるような手だてを講じ、参加者同士の密な交流ができるよう工夫したい。

11 普及計画・普及実績

山陰地方の青少年教育施設の指導系職員に対し、直接当施設の活動プログラムなどについて広報することができた。

成果については当施設ホームページで紹介する。また、事業報告書を作成し、青少年教育施設、青少年教育関係機関等に送付し成果の普及を図る。

(担当 竹下修二)